シンポジウム 公害・農薬中毒の内科臨床

(4') 農 薬 肺 臓 炎

発言 佐久地方における農薬中毒の実態

佐久総合病院

若 月 俊 一

SYMPOSIUM ON CLINICAL OBSERVATION ON THE PUBLIC NUISANCES AND AGRICULTURAL PESTICIDE POISONINGS

4) PESTICIDE PNEUMONITIS

4') THE ACTUAL STATE OF POISONING BY AGRICULTURAL PESTICIDES IN MINAMI-SAKU DISTRICT

Toshikazu WAKATSUKI

Saku Central Hospital, Nagano Prefecture

わたくしどもは、長野県南佐久郡下に、水田、リンゴ、菊、野菜の生産地帯別に部落を選定し、毎年6月から9月末までの4カ月間に、直接農薬散布に従事する農民に、その中毒症状がどのように発現するか、その実態の調査をこの4年間続けてきた。その結果を報告し、若干の考察を加えてみた。

この調査の方法は、被検者に「農薬使用者健康カレンダー」を渡し、毎日これに記入せしめるが、調査員が約10日に1回面接におもむき、これを点検した。農民自身が自ら「農薬散布に因る」と判断した病的症状は、すべてこれを含めることにした。この農民の判断には、わたくしども自身ができ得る限り現場におもむきその中毒の実情の確認に努めた。それらの大部分が急性中毒症状であることはいうまでもない。

昭和39年では1,250人について、4カ月間に症状を発した者の率は17.1% (男18.5, 女15.6), 昭和40年では838人について、23.0% (男23.6, 女21.5), 昭和41年では429人について、25.4% (男

29.0, 女18.0), 昭和42年では246人について、26.0% (男28.6, 女16.6) の結果をえている。

これを農薬使用回数に対する発病率でみると、昭和41年では4.6% (男4.5, 女4.7), 昭和42年では5.4% (男5.8, 女2.7) となつている。そのうちわけを年次的にみると、有機燐剤の中毒は減つてきているが、逆に除草剤、硫黄剤の中毒は近年著しくふえてきていることが分る。

中毒症状を惹起した農薬の割合を、生産地帯別にみると、水田地帯では有機水銀剤が最も多く、果樹地帯、花卉地帯では有機燐剤、野菜地帯では有機塩素剤が最も多い。

これらの症状の多くは、急性中毒による全身的なもので、頭痛、頭重、全身倦怠感、めまい、吐き気、多汗などが主であるが、その他に、皮膚障害、眼障害、咽頭・鼻腔などの障害の訴えも相当にある。

一般的にいつて、この調査は急性中毒的のものが対象となるから当然、有機燐剤によるものが最も多く、その中でパラチオンなどの強毒性のもの

がとくに多い。また有機塩素剤ではエンドリンなどによるものが目立っている。さいきんは、P C Pなどの除草剤、ダイセンのような有機硫黄剤、またとくにダイホルタンなどの皮膚障害例がふえてきたことが問題であろう。

これらの中に、明らかに農薬allergyと思われる症例も若干認められた。

また、同期4カ月間に、パラチオンの共同防除に従事した農民数十名についての、白血球数、コリンエステラーゼ活性値の継続的測定の結果は、前者に増加、後者に低下の傾向が認められたが何れも軽微であり、また肝機能障害はほとんど認め

られなかった。

なお、当病院の農薬中毒臨床例は、41年度27例、42年度17例で、ほとんどが急性の中毒例であつた。そのうちわけは、全身中毒症状(22~24%)、皮膚炎(59~63%)、眼障害(0~4%) 両年を通じて慢性中毒の疑いのものが4名あつた。これに対して、日本農村医学会が昭和42年度に、全国56病院で診療した農薬中毒の313例を検討してみると、全身中毒症状は39%、皮膚炎は34%、眼障害は13%であつた。なお肺炎・気管支炎は9例あつた。